11　　の北の方　　　　　　　　　　 　　文法　形容動詞

読解　評価の根拠をつかむ

は、見目の世にⓐ憎さげなる人なりけり。その北の方は、ⓑ華やかなる人なりけるが、を見侍りけるに、とりどりに、華やかなる人々のあるを見るにつけても、づわが男のさ㋐心憂くおぼえけり。家に帰りて、すべて物をだにも言はず、目をも見合はせず、うち向きてあれば、しばしは、何事の出で来たるぞやと、①心も得ず思ひゐたるに、次第にひまさりて㋑かたはらいたきほどなり。ある日、夜ⓒ静かにて、月の光、風の音、物ごとに身にしみわたりて、人のうらめしさもとりそへておぼえけるままに、心を澄まして、を取り出でて、時の音にとり澄まして、②繰り返しひけるを、北の方聞きて、心はや直りにけり。それよりに仲らひめでたくなりにけるとかや。③優なる北の方の心なるべし。

語注

北の方＝（寝殿造の「北の対」に住んだことから）貴人の妻。奥方。夫人。多くは正妻。

五節＝宮中の祭事で、五人の舞姫によって演じられる、舞楽を中心とする行事。

篳篥＝雅楽に用いる竹製のたて笛。

【原文】

刑部卿敦兼は、見目の世に憎さげなる人なりけり。その北の方は、華やかなる人なりけるが、五節を見侍りけるに、とりどりに、華やかなる人々のあるを見るにつけても、先づわが男の悪さ心憂くおぼえけり。家に帰りて、すべて物をだにも言はず、目をも見合はせず、うち側向きてあれば、しばしは、何事の出で来たるぞやと、心も得ず思ひゐたるに、次第に厭ひまさりてかたはらいたきほどなり。ある日、夜静かにて、月の光、風の音、物ごとに身にしみわたりて、人のうらめしさもとりそへておぼえけるままに、心を澄まして、篳篥を取り出でて、時の音にとり澄まして、繰り返し謡ひけるを、北の方聞きて、心はや直りにけり。それより殊に仲らひめでたくなりにけるとかや。優なる北の方の心なるべし。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

刑部卿敦兼は容姿の劣った人だった。その北の方は［　　　　］の舞で［　　　　　　］な人を見て、夫のことが嫌になり遠ざけていたが、夫の［　　　　］と歌を聞いて［　　　］を打たれ、夫婦仲（＝［　　　　　　］）が格別によくなった。

問二　波線部㋐・㋑の意味を選べ。〈2点×2〉

㋐　ア　面白く　　　　　イ　気の毒に

　　ウ　寂しく　　　　　エ　不愉快に

〔　　　〕

㋑　ア　おかしく　　　　イ　仕方がなく

　　ウ　苦々しく　　　　エ　どうしようもなく

〔　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓒの形容動詞の活用形を選べ。〈2点×3〉

ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　終止形

エ　連体形　　オ　已然形　　カ　命令形

ⓐ〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕　ⓒ〔　　　〕

問四　［チェック問題］形容動詞

(1)　次の活用表を完成させよ。〈1点×2〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 堂々たり | 遙かなり | 基本形 |
|  |  | 語幹 |
|  |  | 未然形 |
|  |  | 連用形 |
|  |  | 終止形 |
|  |  | 連体形 |
|  |  | 已然形 |
|  |  | 命令形 |
|  |  | 活用の種類 |

(2)　次の傍線部の形容動詞の活用形を、問三の選択肢から選べ。〈2点×4〉

・ませのうちなる白菊もうつろふ見るこそ１あはれなれ（古今著聞集）

・いづ方につけても２おろかならざらむこそよからめ（源氏物語）

・北には３として、松吹く風４索々たり。（平家物語）

1〔　　　〕　2〔　　　〕　3〔　　　〕　4〔　　　〕

問五　傍線部①とあるが、この時の敦兼の説明として最も適当なものを選べ。〈8点〉

ア　妻が自分への愛が感じられない様子を見せることを悲しんでいる。

イ　妻が自分に対してあからさまな嫌悪感を示すことに憤っている。

ウ　妻が自分に突然よそよそしい態度を取ることに戸惑っている。

エ　妻が自分の容姿を今になって問題にすることを不思議がっている。

〔　　　〕

問六　傍線部②とあるが、この時の敦兼の説明として最も適当なものを選べ。〈8点〉

ア　夜風の快さと裏腹に、妻の理不尽な態度を恨んでしまっている。

イ　夜のもの悲しい風情を感じる中で、妻の態度を残念に思っている。

ウ　月の光や風の音に感動して、妻への愛情を思い出している。

エ　静かな夜に心を鎮めて、妻への憤りも忘れ無心になっている。

〔　　　〕

問七　傍線部③とあるが、北の方のどのような点を「優なる」というのか。次の文の空欄に合う言葉を、十五字以内で答えよ。〈14点〉

篳篥と歌を聞いて、〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕点。

【解答】

問一　五節／華やか／篳篥／心／仲らひ

問二　㋐＝エ　㋑＝ウ〈2点×2〉

問三　ⓐ＝エ　ⓑ＝エ　ⓒ＝イ〈2点×3〉

問四　(1)〈1点×2〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 堂々たり | 遙かなり | 基本形 |
| 堂々 | 遙か | 語幹 |
| （たら） | なら | 未然形 |
| たり  と | なり  に | 連用形 |
| たり | なり | 終止形 |
| たる | なる | 連体形 |
| （たれ） | なれ | 已然形 |
| （たれ） | （なれ） | 命令形 |
| タリ活用 | ナリ活用 | 活用の種類 |

(2)　1＝オ　2＝ア　3＝イ　4＝ウ〈2点×4〉

問五　ウ〈8点〉

問六　イ〈8点〉

問七　（篳篥と歌を聞いて、）敦兼の風雅な心映えを感じ取った（点。）（15字）〈14点〉

【現代語訳】

刑部卿敦兼は、見た目がたいそう劣った様子の人であった。その妻は、きらびやかで美しい人であったが、（北の方が）五節の舞を見ました時に、さまざまに、美しい人々がいるのを見るにつけても、なんといってもわが夫のみっともなさを不愉快に感じた。（北の方は）家に帰って、全く一言さえも話さず、（夫と）目をも合わせず、横を向いているので、（敦兼は）少しの間は、どんなことが起こったのかと、事情がわからなく思っていたところ、（敦兼は）次第にいとわしい気持ちがまさって（その仕打ちは）苦々しいほどである。ある日、夜静かで、月の光や、風の音が、何かにつけて身体中にしみ入って、（そこへ）妻への残念さも付け加わって感じられたのにまかせて、（敦兼は）心を鎮めて、篳篥を取り出して、季節に合う調べを心を込めて奏でて、繰り返し謡ったところ、妻は（これを）聞いて、（夫を嫌に思っていた）気持ちがすぐに治まってしまった。それから格別に夫婦仲がすばらしく（よく）なってしまったとかいうことだ。優雅な妻の心映えであるに違いない。

【補充問題】

問１　「家に帰りて～うち側向きて」（３〜４行目）とあるが、北の方がこのような態度を取る理由として最も適当なものを選べ。

ア　夫と美しい自分は釣り合わないという思いを、周りの人々に示そうとしたから。

イ　美意識が低く、美しく着飾ることを一切しない夫を、うとましく思ったから。

ウ　五節の舞の美しい人々と比べて際立つ夫のみっともなさを、不愉快に感じたから。

エ　得意の笛で自分の機嫌を取ろうともしない夫を、腹立たしく思ったから。

問２　「心はや直りにけり」（７行目）とあるが、その理由を二十五字以内で答えよ。

【補充問題解答】

問１　ウ

問２　夫の笛の音がすばらしく、夫の魅力に気づいたから。（24字）